

銭湯ペンキ絵師

つれづれ日記

第14回

田中みずき (銭湯ペンキ絵師)



銭湯への距離感

先月号では70年代からの銭湯離れの様子を小説等から観てきました。今回は、現在の作品で銭湯が語られる視点を観ていきたいと思います。

近年、小説や漫画や映画で銭湯を舞台にした作品が多数発表されていますが、特に漫画の作品では多様な捉え方が出てきています。銭湯に注目を集めるきっかけになった作品といえば、漫画『テルマエ・ロマエ』（ヤマザキマリ、『コミックビーム』、エンターブレイン、2008 - 2013）。古代ローマの建築家が、ワーブしてきた現代日本の入浴の文化に驚くという物語です。ベストセラーになり映画化もされ、出てきた銭湯への注目も高まりました。当時、古代ローマ人というほど時代も距離も離れた視点から銭湯を捉えなおすという距離感こそ、現代の銭湯受用の姿勢なのだと思わしたことを思い出します。

銭湯という舞台

その後、大手出版社の雑誌で連載される銭湯を舞台にした作品として、「の湯」（久住昌之原案協力、釣巻和、『少年チャンピオン』、秋田書店、2015年-）、「いいゆだね！」（秋本治、『ウルトラジャンプ』、集英社、2017年-）、「下町銭湯物語」（大島永遠、茶柱渋谷『ヤングキング』、少年画報社、2017-）といったものがあります。後者2作品では経営の傾く銭湯を若い女の子が救うという設定が共通しています。銭湯の減少や、後継者不足、経営の問題など、1970年代以後の銭湯離れの後の時代の側面を捉えていくものになりそうですが、現状としては2作品とも銭湯が古き良き人情話の舞台となっており、定型の銭湯観を作っているように思えます。今後、銭湯を救うのが「若い女の子」という設定が、色気を醸し出すサービスに終わるか、時代の姿を拾うものになるのか、興味深いところです。

観光客的な関わりかた

『の湯』は、浅草で人力車を引く女性車夫と同居人、日本が好きな外国人という3人の若い女の子たちが一

緒に都内の様々な銭湯を巡っていく物語です。サラリーマンが銭湯の帰り道で一杯飲むという『昼のセント酒』（和泉晴紀作画、カンゼン社、2011年）でも原作・原案を担当している久住昌之氏が手掛け、どちらも店舗紹介をしている点が特徴的です。また、この2作品では、ある姿勢が印象的でした。それは、批評家・作家の東浩紀氏が近年述べる「観光化」です。これは旅先などで行う一般的な「観光」ではなく、「人間が豊かに生きていくためには、特定の共同体にのみ属する『村人』でもなく、どの共同体にも続かない『旅人』でもなく、基本的には特定の共同体に属しつつ、ときおり別の共同体も訪れる『観光客』的なありかたが大切」（東浩紀、『ゲンロン0 観光客の哲学』、ゲンロン、2017年）といった概念の中での「観光客」です。

銭湯に行った時に出会う常連客は地元のお年寄りかほとんどですが、そのほかに銭湯好きで様々な銭湯をめぐる方や毎日ではなくとも月数回訪れるお客がいます。後者が「観光客」的なお客なのですが、銭湯に入る習慣から離れた世代はここにいるはずで、ダイケアセンターや、地域の高齢者のための入浴施設が区によって作られる中、この観光客的利用者層をつかめるか否かが、今後の銭湯の利用客数に大きくかわることになるのではと思っています。観光客的銭湯利用者の絶対数を増やし、その中から常連となってくれるお客を育てていけるかが重要です。

立地場所によって集客の状況も変わる中、漫画の中で「観光客」的なお客を描き、読者自身が観光客化できる情報を入れている点、現代の銭湯利用を鑑みると大変重要な視点と言えるでしょう。今後も、創作物や批評の中でどのように銭湯が描かれていくのか、注目していきたいと思っています。

プロフィール ● 1983年大阪生まれ。幼少時から東京在住。筑波大学付属高等学校進学後、明治学院大学在学中に銭湯ペンキ絵師・中島盛夫氏に弟子入り。現在は独立し、銭湯のペンキ絵のほか、老人ホームの浴室や店舗など制作の場を広げている。現代美術展覧会・レビュー情報サイト「カロンズネット」元編集長。ペンキ絵制作に関する活動は、ブログ「銭湯ペンキ絵師見習い日記」(<http://mizu111.blog40.fc2.com/>)にて随時掲載。